感動の表彰式
受賞者の想いが会場を一つに

2025年度「小さな親切」運動全国表彰式

〈後　援〉内閣府・文部科学省・NHK
〈と　き〉2025年11月28日（金）
〈ところ〉秋葉原UDXシアター
〈司　会〉石井麻由子（NHK財団・ことばコミュニケーションセンター専門委員）
※各賞の受賞者、コンクール入賞・入選者氏名は運動本部WEBサイトにてご紹介しています。

来賓あいさつの内閣府・大臣官房総務課 栁澤泰洋制度室長

去る11月28日（金）、初めての会場となる「秋葉原UDXシアター」にて、2025年度「小さな親切」運動全国表彰式を開催。平日にもかかわらず、全国から約150名の方々が参加してくださいました。

式典は、長年にわたり「小さな親切」運動を推進する方々への「内閣官房長官賞」の授与からスタート。また、今年度特に顕著な活動をした個人や団体に贈る「小さな親切」運動大賞および運動賞の表彰を行いました。

続いて行われた「第41回はがきキャンペーン（エッセイコンテスト）」、「第50回作文コンクール」の表彰では、それぞれのコンクールの歴史や意義などを紹介するVTRを上映し、参加された皆様に、運動本部が目指す「書く」ことで自らの心を育てることの大切さをお伝えすることができました。

賞状授与後は、入賞作品の朗読のほか、受賞者やご家族へのインタビューも行い、作品に込めた想いや裏話などを語っていただきました。地域の温かなエピソードにほっこりしたり、小中学生の素直でひたむきな想いに思わず涙したり。人と人をつなぐ「小さな親切」の良さを、改めて感じていただけていれば嬉しいです。

主催者あいさつをする運動本部・鈴木恒夫代表

第41回 はがきキャンペーン 受賞者インタビュー

地元の良さを再発見

長崎県西海市の大島に暮らす**小中尾（こなかおまお）政子**さんは、高校時代のお嬢さんのエピソードを綴り、大賞を受賞しました。佐世保にある高校まで船で通学していたお嬢さんは、ある朝お弁当を港の待合室に置き忘れてしまいます。それに気づいた船員さんが冷蔵庫で保管し帰りに渡してくれた、という温かな島の生活が垣間見える作品です（本誌秋号〈№540〉に掲載）。

表彰式当日は、お嬢さんにもお話をお聞きしたところ、実はお弁当を忘れたのは一度ではなく、小学生のころは学校にランドセルを忘れて帰ってきてしまったこともあると打ち明け、会場は和やかな笑いに包まれました。

マイペースなお嬢さんを「私は叱ってばかり。船員さんをはじめ、地域の方々が見守り、育ててくれたようなものです。」と語る母親の政子さん。今回の受賞で、島の人々の温かさは当たり前ではないと気づき、改めて地元の良さを再認識したそうです。

これからは、島の人々から受けた親切のお返しに、「親子で親切の種まきをしたい」と話してくださいました。

お嬢さんの彩（あや）さん

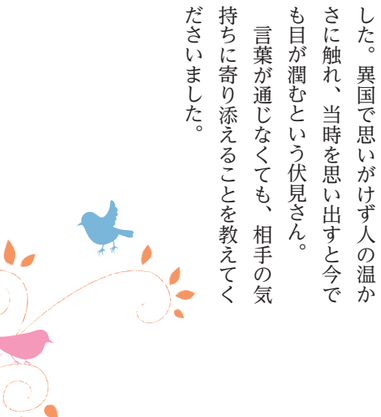
異国の地で手渡された「キャンディ」

2011年の東日本大震災発生時、ロンドンの企業に勤務していた**伏見香名子**さんは、当時の忘れられない想い出を綴ってくださいました。次々と報じられる日本の惨状に、「自分は帰る故郷を失ってしまうのではないか」と大きなショックを受ける中、遠い異国で今はできることはないと上司に説得され、以前から予定していたセルビア共和国へ旅に出ました。

しかし、首都ベオグラードに着いても気持ちは観光どころではなく、不安は増すばかり。そんな中、現地の人々が次から次へと伏見さんに話しかけてきました。英語が通じず、何を言っているのだろうと怪訝に思っていたところ、かろうじて聞き取れたのが「アトム」という単語。セルビアの人たちは、福島の原発事故を心配して声をかけてくれていたのです。

旧ユーゴスラビアを構成する共和国の一つだったセルビア。紛争や経済制裁でダメージを受けた同国の復興のため、2003年に日本がバス93台を寄贈したことを現地の人々は忘れておらず、「がんばれ」とばかりに手にキャンディを握らせてくれたおじさんもいました。異国で思いがけず人の温かさに触れ、当時を思い出すと今でも目が潤むという伏見さん。

言葉が通じなくても、相手の気持ちに寄り添えることを教えてくださいました。



感動の表彰式
受賞者の想いが会場を一つに

2025年度「小さな親切」運動全国表彰式

第50回 作文コンクール 作品朗読とインタビュー

内閣総理大臣賞・森田くん

受け取った優しさをつなぐ

大臣賞受賞者2名は、どちらも「家族から受け取った優しさ」をテーマにした作品を朗読してくれました。**内閣総理大臣賞**を受賞した**森田智仁**くん（栃木県・宇都宮市立中央小5年）は、言葉の発達が遅かった自分を「大丈夫」「できるようになるまでの時間は人それぞれ」と、いつも笑顔で見守ってくれたおじいさんについて綴りました。おじいさんの家にあった地球儀を回しながら、二人で様々な話をしたことを森田くんは「心のやりとり」と表現し、自分もおじいさんのように誰かの心を温められるような存在になりたいと願います。

病により言葉を発することが難しくなってしまったおじいさんですが、心と心の会話は今も続いています。

ひいおばあさんについて書いてくれたのは、**文部科学大臣賞受賞**の**國分穂乃花**さん（福島県・大玉村立大玉中1年）。一昨年の夏、熊の出没を不安がる自分のためにバス停までついてきてくれた優しいひいおばあさんは、暑さがたたったのか体調を崩し、その後お亡くなりになりました。國分さんは自分を責めますが、やがて誰にでも親切だったひいおばあさんの想いをつなごうと、自分も親切を心がけるようになります。

自らの決意を伝えるように「ばあちゃん、私、がんばるね。」と締めくくった朗読に、会場は感動に包まれました。

おじいさん、ひいおばあさんの優しさは、確実に二人の心に受け継がれています。身近な人を想う気持ちが思いやりの原点であると、改めて実感させられた胸をうつ作品朗読でした。

文部科学大臣賞・國分さん

「ベストパーソン」になれなくても

今年度の入賞作品の中には、「見えない親切」について書かれたものがいくつかありました。目立たないところで、誰かのために何かをしている人が私たちのまわりにはたくさんいます。

特別優秀賞に輝いた**北原光**くん（長野県・信州大学教育学部附属松本小2年）もその一人。北原くんのクラスでは、その日一番親切だった人を「ベストパーソン」に選び、ありがとうを伝える活動をしています。クラスの雰囲気が温かくなり、とてもいい活動だと思っていた北原くんですが、自分は毎日ほかの人の植物の鉢にも水やりをしているのに、なかなかベストパーソンに選ばれず、だんだんとモヤモヤしてしまいました。

そんなとき、同じクラスの友達が北原くんの親切に気づき「ありがとう」と言ってくれました。その一言に胸がじんわり温かくなった北原くんは、自分のように見えないところで親切をしている友達がほかにもいるはず、「ぼくはそんな小さな親切に気づける人になりたい」と綴ってくれました。

インタビューでは、「どうやってベストパーソンを選んでいるの？」「好きな教科は？」などの質問に答え、学校生活の様子も話してくれた北原くん。まだ小学校低学年であるにもかかわらず、人知れず誰かのために行動し、見えない親切の大切さに気づいた豊かな感受性に、会場からは大きな拍手が送られました。

（左より）運動本部作文審査員の小倉潔先生、馬場喜久雄先生

50年にわたって積み重ねた言葉は東京タワーを超えた！

1976年にスタートした「小さな親切」作文コンクールは、今年度第50回の節目を迎えました。これまで応募された作文（一人当たり原稿用紙3枚）をすべて積み上げると、なんと約472メートル。東京タワーを優に超える高さになります。

第1回コンクールに応募された小学校1年生は現在56歳、中学校3年生だった方は64歳。2代3代にわたって、応募してくださった方もいるかもしれません。こんなにも長くコンクールを続けてこられたのも、応募してくださった小中学生、学校や自治体、地域組織などの皆様の協力のおかげです。

また、毎年応募された作文一つひとつに目を通し、審査してくださっている先生方も影の功労者。運動本部では、全国の審査員の先生方、100名以上に「第50回記念表彰」の賞状を贈り、これまでの功績を称えました。

これからも、作文による豊かな心づくりを進めてまいりますので、ぜひご協力ください。

感動のエピソード満載

「はがきキャンペーン」「作文コンクール」入賞作品を収録した作品集『見えない宝物』を発行します。インタビューに答えてくださった皆様の作品も掲載していますので、ぜひWEBサイトよりお申し込みください。

発行日：2025年2月16日
価　格：1,000円（送料別途）

※作文コンクールは上位39作品を収録。入選は学校名・氏名のみ掲載となります。

オリジナルTシャツ販売中!

表彰式の会場で特別販売しご好評いただいたTシャツを数量限定で販売中。背面に運動のイメージイラストが入った、オリジナルデザインです。サイズはXLのみ。ぜひこの機会にGetしてください。

価格：1枚3,000円
（送料無料）

参加者の声

「小さな親切」運動の歴史もわかり、
普段の心がけをもっと行動に移せるよう
我が子たちにも伝えて行きたいです。
本当に温かいお式で、
スタッフの皆様の
優しく気の効いたご対応にも
感謝いたします。
［はがきキャンペーン受賞者］

大変心温まる式で、
家族一同出席して
本当に良かったと思っています。
［作文コンクール受賞者・保護者］

すてきな式にお招きいただき
ありがとうございました。
息子は緊張せずに楽しめたようで、
大変良い思い出になりました。
［作文コンクール受賞者・保護者］